

# 高等教育機関における学習支援アプローチとその役割

—米国学習センターの事例から得られたこと—

Learning Support Approaches and Roles in Higher Education Institutes  
- Lesson Learned from the Learning Center Activities in the U.S. -

根本 淳子\* 椿本 弥生\*\* 渡辺 雄貴\*\*\* 美馬 のゆり\*\* 鈴木 克明\*  
Junko Nemoto Mio Tsubakimoto Yuki Watanabe Noyuri Mima Katsuaki Suzuki

熊本大学\* 公立はこだて未来大学\*\* 首都大学東京\*\*\*  
Kumamoto University\* Future University Hakodate\*\* Tokyo Metropolitan University\*\*\*

〈あらまし〉本発表では高等教育機関における学習支援の可能性について、米国における学習センターの事例を題材に整理した。各実践が活かされる土台として、学習センターなどの支援構築は重要である。本発表では、米国にて調査した2つの学習センターの事例について紹介し、それらの事例で取り組まれていた学習支援を授業外学習支援リストとしてまとめた。

〈キーワード〉 学習支援, 高等教育, 学習センター, 調査報告

## 1. はじめに

本稿では、米国での学習センター調査成果について報告する。ICTを導入した支援が提唱された1990年代のインフォメーションコモنزという考えは、現在はラーニングコモنزと呼ばれ定着しつつある。教育のパラダイムシフトに伴い新しい学びのスタイル、例えば協調学習やプロジェクト型学習などの活動が評価され、学習者中心の学習活動の採用により授業外の学習支援の役割も新たに追加されている。

今回は、広い学習者層を持つ米国での動向に注目し、学習センターの支援活動について調査した。訪問先2校の授業外学習支援を担う学習センターの活動の相違点・相似点を確認しながら、国内での学習支援やセンター運営への発展に役立つことを期待し、学習センター活動の学習支援を学習支援を整理しようとした。

## 2. 調査先概要

2010年度に渡米し、学習センターを有し積極的な活動を行っている大学2校を調査した(表1)。この2機関は米国 NCLCA (National College Learning Center Association, 2011) 学会での活動や同学会での優秀センター表彰の経験など踏まえ訪問先として選択した。各センターの公開資料や報告書を参考に各センターの学習支援活動を現地視察とスタッフインタビューを通じて支援活動の実態をより正確につかむように行った(鈴木, 2011)。

表1 訪問先リスト

2011年1月—デイトナ州立大学 [DSC] (フロリダ)
2011年1月—タラハシーコミュニティカレッジ [TCC] (フロリダ)

### 2.1. デイトナ州立大学アカデミック支援センター (Academic Support Center : ASC)

フロリダ州東部にある本大学は、近年4年制の課程を増やした学生数1万7千人(うちフルタイム55%)規模の州立大学である。2006年に数学と英語の学習室として設計された広いアカデミック支援センター(ASC)には、220台のパソコンが設置されていた。数学の授業が行われる教室と隣接し、授業後に立ち寄れる好立地にあった。センター入口には学生が利用登録するキオスクが6台、数台のパソコンが島型に配置されている学習スペース、パソコンが置いていない丸いテーブル、そして20人ほどが一斉に学習できるコーナーなどが見渡せた。10人ぐらい入れる小部屋が5つあった。

学習アシスタントやチューターが常駐し、スタッフが待機していることが分かるように立て札りや名札が利用されていた。オフィスアワーとしても用いられ、学生は気軽に教員と会話する機会を持てるようにしていた。また、授業課題の一部でASCを利用するように授業を設計することで学習者がASCを自然に活用できるように促していた。チューターには、近隣の大学院生や退職高校教諭などのプロが設置されていた。

オフィスアワーの利用や授業との連携によって教員にASCの存在が認知されている。インタビューでは「柔軟性」、「シームレス」、「統合化」というキーワードを挙げ、学習者にとって有益な学習の場を提供することをASCに関与するスタッフ一員すべてが常時意識していることを主張していた。チューターのスキル設定や運用は独自性が高く、NCLCAの資格などは利用されていなかった。

## 2.2. タラハッシーコミュニティセンター・ラーニングcommons

本大学はフロリダ州の州都にある州立短大で、2008年にそれまで学内に点在していた学習支援の組織を全学生対象のラーニングcommonsとしてまとめて一本化した。結果、図書館司書との協力関係が構築され、教員との連携も密になり、学生数1万5千人規模の短大で、学期の最初の5週間で9000人が利用する施設となった。

異なるニーズの学生に対して効率的に仕分けする「分化型支援実施モデル」を考案・採用し、訪問者のニーズに合わせた支援体制を確立した。自学のための資料がどこにあるかを教えるだけの支援、10分程度で学習の開始方法を指南するだけの支援、そして、さらに長時間の継続的支援が必要な者の3区分でまずは診断し、効率的に多くの学生を扱っている。1階は数学系の自習室で、180人収容可能な広々とした部屋にPCありとなしの丸机が配置されていた。統計・代数・テクノロジーなどに色分けされたコーナーに資料や教科書が置かれていた。学生はPC上の利用者管理システムで何をしに来たかを登録し、そのままPCを使ったり、チューターや支援専門家に相談をしたりしていた。自習室の周囲には、PCが置かれた教室やグループワークや個別チューティングに使う小部屋があり、図書館の「静粛ゾーン」につながっていた。2階は語学系の自習室で1階と同じような配置であった。2階からつながる図書館には論文執筆の支援コーナーがあり、予約制で1回30分の個別指導が受けられる。その奥には図書館のレファレンスデスクがあり、両方を往復できるように配置されていた。

ラーニングcommons運営の5原則として **Inclusive** (全レベルを対象とする)・**Integrate** (重複したサービスをなくす)・**Pro-actively** (既存のリソースを有効活用する)・**Collaboration** (スタッフ間で協力しよう)・**Responsibility** (責

任を持って取り組む)の5つが紹介された。ASCと同じく活発で協調的な組織という印象であったが、教育設計の専門家が要職に就き、センターの成果を体系的に発表していることなどからASCよりも体系的かつ組織的であるという印象を受けた。

## 3. 学習支援アプローチの整理

表1と2は学習センターにおける支援方法をハードとソフトに分けて整理した結果である。大学の規模・学生層が異なり、注力点も異なるが学習センターとして共通の支援が多くあることが分かる。このように、さまざまなワンストップサービスとした学習支援サービス実現には単一の施策はないとされつつも(Educause, 2011)、学習センターとして設けるべき機能を確認できる。また、ハード的側面は優先されやすいがそれと並行したソフトサービスが提供されていることも明らかとなった。

表1 学習センターにおける学習支援リスト

項目	TCC	DSC
図書貸出	○	△(別施設)
チュータリング	○	○
ライティング指導	○	△(別施設)
ワークショップ	○	○
オフィスアワー	-	○
IT支援サービス	○	○
授業実施	○(Library関連)	○(課題活動)
補講(Supplemental Instruction: SI)	○	○

表2 学習センター施設リスト

施設	TCC	DSC
カフェ	○	○
個別学習(quiet room)	○	△(別施設)
書架(図書館)	○	△(別施設)
自主学习スペース	○	○
PCルーム	○	○
グループワークスペース	○	○

## 参考文献

- Educause. (2011) 7 things you should know about the modern learning Commons.  
(<http://net.educause.edu/ir/library/pdf/ELI7071.pdf>)  
National College Learning Center Association  
(<http://www.nclca.org>)  
鈴木克明(2011) 学びやすい環境を大学につくるラーニングcommonsとチューター承認制<上><下>日本私立大学協会発行「教育学術新聞」第2428, 2429号